

「互いに足を洗いなさい」

(ヨハネ13:1～17)

挽地茂男

2020.3.29 日本基督教団 千歳丘教会

今日の聖書の箇所は、主イエスが弟子たちの足を洗われたという、有名な「洗足」の記事です。クリスチャンは「洗足」というとすぐに今日の聖書箇所の主イエスの「洗足」のことを思い浮かべられるでしょう。でも普通は「洗足」というと、「洗足駅」とか「洗足池」とか「洗足学園」を思い浮かべられると思います。クリスチャンの方ですと洗足学園はミッションスクールかしらと思ったりするのではないのでしょうか。わたしも長い間そんな疑問を持ってきたのですが、「洗足」の教えは聖書の大切な教えでもありますし、「洗足学園」はミッションスクールですか、とたずねられる度に、「サァ」というのも情けないので調べたことがございます。

実はこの足を洗う「洗足」という地名は、「足を洗う」と書かないで、千の束「千束」(せんぞく)という地名でした。その名は平安時代末期の文献にも見られます。

由来としては仏教用語の千僧供料(せんそうくりょう)の寺領の免田〔免税特権を与えられた田圃〕であって、千束の稲が貢租(年貢、^{こうそ}税)から免除されていたとする説や、「大池」(洗足池の別称)を水源として灌漑に利用されたので、この地の農民には、稲千束分の税が免ぜられていたとする説などがあります。のちに、身延山久遠寺から常陸へ湯治に向かう途中の日蓮が、池のほとりで



広重「名所江戸百景」に描かれた洗足池



現在の洗足池

で休息し足を洗ったという言い伝えが生まれ、千束の地域の一部が〔池を中心に〕足を洗う「洗足」となります。日蓮上人が袈裟をかけたと言われる「袈裟掛けの松」(3代目)が現在も残っています。

その後1924年(大正13年)に目黒蒲田電鉄〔目黒蒲田電鉄(目蒲線)は、1918年に田園調布・洗足などの街づくりのために設立された「田園都市株式会社」の鉄道部門を分離独立し、発足したもの。



後の東急電鉄。2000年目蒲線は目黒線（目黒―田園調布間）と東急多摩川線に分離された

洗足駅が開通し、同時に宅地開発が進められたことから「洗足」の地名が定着していくこととなります。その目黒蒲田電鉄・洗足駅が開業した同じく 1924 年（大正13年）に現在の品川区戸越（平塚村）に一つの学校が設立されます。平塚裁縫女学校という学校ですが、設立の2年後の1926年に洗足の地に移転し、移転に際して洗足高等女学校（のちの洗足学園第一高等学校、2008年閉校）と名称を改めます。ということで洗足学園はミッションスクールではないのだ、ということになりそうですが、設立者の前田若尾は敬虔なクリスチャンで、イエス・キリストが弟子の足を洗った精神を学校の精



洗足像（洗足学園）

神にすべく平塚裁縫女学校という校名を「洗足高等女学校」という名に改名したのです。洗足学園には、キリストが弟子の足を洗っている「洗足像」があります。また、彼女が作詞した校歌には、「互いに足を洗えとのりし／み教え守るこのまなびや」という歌詞が盛り込まれています。設立者の前田若尾は、主イエスの「洗足」の精神をその校名に盛り込んだのです。〔卒業生としては、渡辺真知子、米良美一、平原綾香などがいる〕。

さて今日の箇所から主イエスの「洗足」の精神を確かめたいと思います。どのような状況で洗足の出来事が行われたのかをまず見ておきましょう。1節。

13:1 さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。

別れの時が来たのです。主イエスは今、地上生涯の最後の時を迎えようとしています。愛する弟子たちとの別れの時が刻一刻と迫っていました。主イエスは、今は、何にもまして、別れを告げる人たちがふつうするように、地上に残し

ていく弟子たちに、自分が彼らを
どれほど愛しているかを余すところ
なく示し、弟子たちが知るべき
最も大切なメッセージを彼らの心
の中に刻み込もうとしているので
す。しかし一人の弟子の心に悪魔
がささやきます。2節。

13:2 夕食のときであった。既に
悪魔は、イスカリオテのシモンの
子ユダに、イエスを裏切る考えを
抱かせていた。

主イエスはそれを承知していまし
た。しかし、たとえ裏切る者が目
の前にいようとも、父なる神が委
ねられた生涯をまっとうするため
に、裏切る者を咎める以上に大事
なことがあるのです。なすべき事
がありました。弟子たちへの愛を
示し、最後のメッセージを彼らの
心の中に刻み込むことです。そこ
で、3－5節。

13:3 イエスは、父がすべてを御
自分の手にゆだねられたこと、ま
た、御自分が神のもとから来て、
神のもとに帰ろうとしていること

を悟り、13:4 食事の席から立ち
上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを
取って腰にまとわれた。13:5 そ
れから、たらいに水をくんで弟子
たちの足を洗い、腰にまとった手
ぬぐいでふき始められた。

弟子たちの足を洗い始めたので
す。今は、別れの時なのです。大
切なこと以外のことをしている時
間はないのです。つまり「洗足」
は大切なことなのです。「洗足」
は主イエスの愛と最後のメッセー
ジの具体的な表現として行われる
のです。**別離とは、愛が最大限に
その姿を現すときです。**原崎百子
さんという方〔牧師夫人。ICU
の第一期生で川田殖先生の同期
生〕が癌の告知を受けて、日記と
共に、子どもたちに残す言葉を書
き留めていきます。その言葉を、
紹介させていただきます。

「あなたがたは信ずるだろうか、
この母が、あなたたちをこよなく
愛していることを。……どの一人
をもかけがえのないものとして、



こんなにも切ない思いで愛していることを。……あなたがたが、この母の愛をもし信ずるならば、どうか信じて欲しい、神さまの愛を信じて欲しい。たとい、お母さんが天に召されても、それでも、あなたがたが信じつづけられるように。悲しみを乗り越えて生きていけるように。……四人の子供たちよ。……お母さんを お母さん自身を あなたがたにあげます」

（原崎百子 『わが涙よ わが歌となれ』 新教出版社、1979）

ところで、主イエスと弟子たちの別れの出来事が、1 節では「**過越祭の前**のこと」だと書かれていることに、少し注意が必要です。1 3 章から始まって1 7 章まで、別れの食事、別れの言葉、別れの祈りが続き、1 8 章に入ると場面は一転して、主イエスの受難物語が始まります。つまりこの洗足の出来事があった食事の席は、主イエスが地上で弟子たちと共にした最後の食事、最後の晩餐の席なのです。正確に言いますと「**過越祭**



の前日」に最後の晩餐は行われているのです。ちょっと待ってください、と皆さんはおっしゃるかもしれません。マタイ、マルコ、ルカ福音書〔共観福音書〕では最後の晩餐は過越の食事であったと書かれているし、その食事の席で主イエスはあの有名な聖餐式を制定する言葉を語られたのではないですか。「**過越祭の前**」に最後の晩餐が行われたというのは、何かの間違いなのではないですか。つまりマタイ、マルコ、ルカ福音書〔共観福音書〕とヨハネの福音書では最後の晩餐の日付がずれているのです。最後の晩餐の日付がずれているということは、古くから気づかれていて、たくさんの議論が積み重ねられてきました。ヨハネは神学思想を大切にするので、歴史的情報が不正確だとか、マタイ、マルコ、ルカ福音書〔共観福音書〕とヨハネ福音書では使っているカレンダーが違うとか色々と説明されるのですが、いずれも根拠がありません。むしろ現在では、ヨハネ福音書の方が歴史的に正確な情報を伝えているとさえ言われています。実はマタイ、マルコ、ルカ福音書〔共観福音書〕の最後の晩



餐の記事は、
あの出エジプトを記念する
過越祭の救いのドラマ——
つまり過越の

食事のために小羊が屠られ、その血を鴨居と門柱に塗ることによって、災いが過越しイスラエルの民に救いと解放がもたらされたとする救いのドラマ——と、主イエスが十字架で成し遂げられた救いのドラマを二重写しにしているのです。神の小羊であるイエスは十字架上で屠られます。聖餐のパンは主イエスの体を象徴し、ぶどう酒は主イエスが流した新しい契約の血を象徴するのです。旧約の過越祭がイスラエルの民を救った過越の出来事の記念祭であるように、新約の聖餐式は主イエスを信じる者たちを救う十字架の出来事を記念する祭なのです。福音書を書いた初期の福音書記者たちが比較的自由にイエス・キリストに関する情報を扱っていることを了解しておくことは大切です——例えば、弟子の召命の記事は共観福音書とヨハネ福音書では明らかに違います。しかし情報について比較的自

由と言っても、その意味や意義については実に厳格です。そこを見逃してはいけません。

ではヨハネ福音書が最後の晩餐を「過越祭の前日」に置いている意味や意義とは何でしょうか。共観福音書のように過越祭と最後の晩餐を重ね合わせて聖餐式の意味を画定する理解の仕方は、かなり早い段階で(遅くとも紀元50年頃に)成立しています。ヨハネはこの理解の仕方を知っていたでしょう——もちろんこれは推測です。しかし、もしヨハネが過越祭と最後の晩餐を重ねる理解の仕方を知っていたとすれば、ヨハネは最後の晩餐をあえて過越祭から切り離していることになります。つまりヨハネにとって、最後の晩餐において一番大切なことは「洗足」で表されているのです。一方共観福音書は、最後の晩餐において最も大切なことは「聖餐式の制定」だとしている



エル・グレコ「福音書記者ヨハネ」

るのです。もちろんヨハネが聖餐式を大切にしていることは、ヨハネ福音書の他の記事を読めばすぐ



に分かります。しかしヨハネは、主イエスがこの世を去るに当たって最も大切なこととして伝えたことは「洗足」に表されていると考えているのです。「洗足」に表された大切な意味を、今日の聖書の中に追いかけてみましょう。

主イエスは黙々と弟子たちの足を洗っています。何人かの弟子たちは、黙って主イエスの洗足を受けたようです。そして主イエスがシモン・ペトロのところに来て、彼の足を洗おうとした時でした。13:6…ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言って、少し体を後に引いたかもしれません。それに主イエスは答えて13:7…「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われます。こう言われても、ペトロはさらに主イエスから後ずさるよう



にして13:8…「わたしの足など、決して洗わないでください」と

言います。ペトロは師弟の上限関係を守ろうとします。古代世界では先生(師)と弟子には、つまり師弟関係には明確な区別がありました。この古代における師弟の区別を前提として主イエスの行為は理解されなければなりません。しかも当時、「足を洗う」仕事は奴隷のする仕事だったのです。主イエスはその関係を逆転させます。愛は師弟間の上下を別ける境界線を越えるのです。

主に足を洗ってもらうことを遠慮し拒むペトロに対して、主イエスは13:8…「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えます。つまり主イエスが彼の足を洗うということは、足を清潔にするということ以上にもっと深い意味があるのです。

「何の関わりもない」と訳されている言葉(ウウク・エケイス・メロス・メテムー)は、直訳すると「あなたはわたしと分かち合うものを持っていない」という意味です。洗足は、主イエスの奉仕を受け入れることによって、主イエスと分かち合うものを共有する、主イエスとの関係や結びつきに入

が主イエスとの関係を創る大切なことだと来れば、ペトロがこう考えても当然です。

- 7 -

はその人の資質や精進や努力によ



って達成されるものではありません。清い方との関係によって保証されるもの、**清さは主イエスとのそして神さまとの結びつき**

によって決定されるものなのです。そして神に一心に向かう心によって保たれるものなのです。ですから関係を断とうとしているユダについて「**皆が清いわけではない**」と言われるのです。「清さが主イエスとの結びつきによって決定される」ならば、裏切る者は、当然、清くない者となるのです。彼は主イエスとの結びつきを断つ者、主イエスとの一体化と親密さを拒否する者だからです。清さは資質の問題ではないのです。自分の汚れを汚れとし、その汚れを清



めてくださる方への信頼によって清さがわたしのものとされるのです。たとえわたしたち自身が清くなくてもそうなのです。清さは達成目標ではなくて、恵み、賜物、結果なのです。既に洗礼によって象徴的に「全身を洗った」者は、日々の歩みで汚れる足の汚れを、主イエスとの関係を修整することによって、清めていただくのです。

弟子たちの足を洗って、上着を着て、再び自分の席に帰ると、主イエスは弟子たちに、こう言われました。12-17節。13:12 …「**わたしがあなたがたにしたことが分かるか。13:13あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。13:14** ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。13:16 はっきり言っておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさはしない。13:17 このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸

いである。」主は仕えるためにこの世界にこられました。しかし、わたしたちこそが主なる神に仕え、隣人に仕えるべき僕なのです。主イエスは主と僕の間を逆転して、徹底して仕える者の姿を貫かれました。ここに最後の晩餐で示されたもう一つの精神、大切な教えがあります。共観福音書は聖餐式を最後の晩餐に設定しました。十字架上で砕かれた主イエスの体を象徴するパンをいただき、流された血潮を象徴するぶどう酒をいただくことによって、主イエスの救いの御業を、深く心に刻む大切な礼典です。一方ヨハネ福音書は、最後の晩餐において、人を愛して自分自身を与え、人の罪を覆い、人に仕える者であり続けた主イエスの生涯を「洗足」という形に凝縮します。とすれば、本来、聖餐式で確認される主イエスの精神と、洗足で確認される主イエスの精神は同じものです。

キリストの体であるパンを食し、キリストの血であるぶどう酒を飲みながら、人を愛することも、人の罪を覆うことも、人に仕えることもどうでもよいような表面的な宗教儀式と、主イエスは無縁の

方なのです。「洗足」は「聖餐式」（つまり当時の礼拝=service）の精神、神髄すなわち「仕えること」を、十字架とは異なる形で表現しているのです。大切な教えを伝えるために、主イエスは師弟関係を逆転して、模範として見せたのでした。弟子たちの足を洗うことは、主イエスの愛の表現であると同時に、「互いに愛し合いなさい」という主の掟を具体化するキリスト者の基本的行動パターンなのです。



主イエスは弟子たちにこういわれました。15章12-15節。
15:12 わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。15:13 友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。15:14 わたしの命じることを行えば、あなたがたはわたしの友である。15:15 もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことを

すべてあなたがたに知せたからである。何という言葉でしょうか。こんな所に友だちがいることを忘れてはなりません。主イエスの精神を生きる人、主の愛を模範として生きる人、その人には主イエスが友となられるのです。

また主イエスは、こうも言われました。ヨハネ福音書 13 章 34 - 35 節。13:34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。13:35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。宣教の始まりがここにあります。主イエスに愛されたもの同士が、互いに愛し合い仕え合う交わりの中にあるのです。

主イエス・キリストとわたしたちの足を洗って頂きましょう。そして、わたしたちも人の足を洗いましょう。関係は分かち合うものを共有するときに結ばれます。わたしたちは清くしていただく必要があるでしょうか。あるならば、主イエスの準備はすでに整っています。主イエスとの関係も育つも

のです。一時なおざりにされた関係でさえも新たにされるのです。主イエスに足を洗って頂く時、キリストの愛が生き活きとわたしたちに帰ってきます。その愛によってわたしたちの群れが互いに愛し仕えあうならば、世界への証しとなるのです。

新しい1週間も、キリストと共に歩みましょう。祈ります。

2020.3.29 日本基督教団 千歳丘教会

